蟲豸
奇談

ものさ茅屋志

二上

PL
795
H65
C4
1796
v.2:1

AS

V2.1

蜂勢集事
米虫百足害事
蟻似我蜂問答事
蜘蛛蠅問答事
蛍蜘蛛害事
悪虫悪虫集事
蟻蜂野狐事

蠅蟻同芸の事
蓋虫玉虫折擲事

清涼寺にて二

そこに時より蛭ハいとも高きに赤く
ゐて行ぐるに此ものハ赤ごんやう
黒甲紙おぐ吐濃こそあるはくいるに
もさうるし色ものこの光敬くに稀
南天寺の杉に風流とかの面白
山に甲ハ色ハひぐ記冥みちく
を分むりんのくやぐ称そとぶきの

とも集り泉水のおりて小舟に乗せ
うたへ歌を歌ひ酒一巡する事
よりて今の代より始まりしなり初めまうち
よもの名所水無瀬おくのむしふかを
取り入れ酒を飲ませ奥ありと云へ
し流れんむしは木の葉をだにたぐひふ
ちうち銭金をばらまきをいを
やをくとこびわうう系しふをあつら

酒代をもうけ酒さむしー浪をたぐへと
おびくしー巻むしの内に八重に酒宴に酔
ひて忘れ銭金をばる出をふー中ふも名を茶出八
能の書組出をうくあれかうまれて居ちりしう
先ひつさ能ハう海きりれ中の海出をけぐめ
二番めの所能本ハうまれとおりよ内ふ時は
あを手をはきをすを者をむこそいては
きれとをばう紙のゆひりとを矛う絲きふ

ちひのぼる事よりもしをとこ波せたまん
ものぐさよりもうるさいぬのをとやうも
かぶのむしハよりもつらくこれは茶碗おろ
うそまいくほどうハいばくよりも角紙おせ
ゑをおせとおもをくりかへ一度の長ハ
りとよりも字治石山よりそ年くれかゝる合
戦より利ぬそうる名ばかりまハさハがそしてたい
まうし給ようやうあるもちろんをけ

知ぬ人ハ茶むしをを出しそのうちへのぞき
ひやうまそ蛾のてくよ集つと赤面へ切くあ
かりて茶よりも味よりも屁ひるしと名茶
てお屁ぬまりとりて入ぬ水蛙れ考くろ
うそおしの瓶きそ百の思ふ後私しを一陣
ふをみりう茶むしれ四ちをまことのつ
ろうくうんくく茶むしーぎもひそあも
蛙そ自ぶ年ちのそ後れ地の及端の下

小して数あまたの蛭出るむかでやくどく
せきとその毒をとれば蛭出ず毒を
きのむとき毒ついく流ちりまたはたらく
毒を折うるづれ毒やくの虫はたらかまものの
法をうけ蜂の羽ちてしいぐる矢蛭ちりてく
先祖の例蛭くらうは矢の根くに蛭ちてうけ
うち毒をつくもちりの矢蛭蝶がとりんさうけとめ
百の痛松一度はこうえ大地すごしたれる

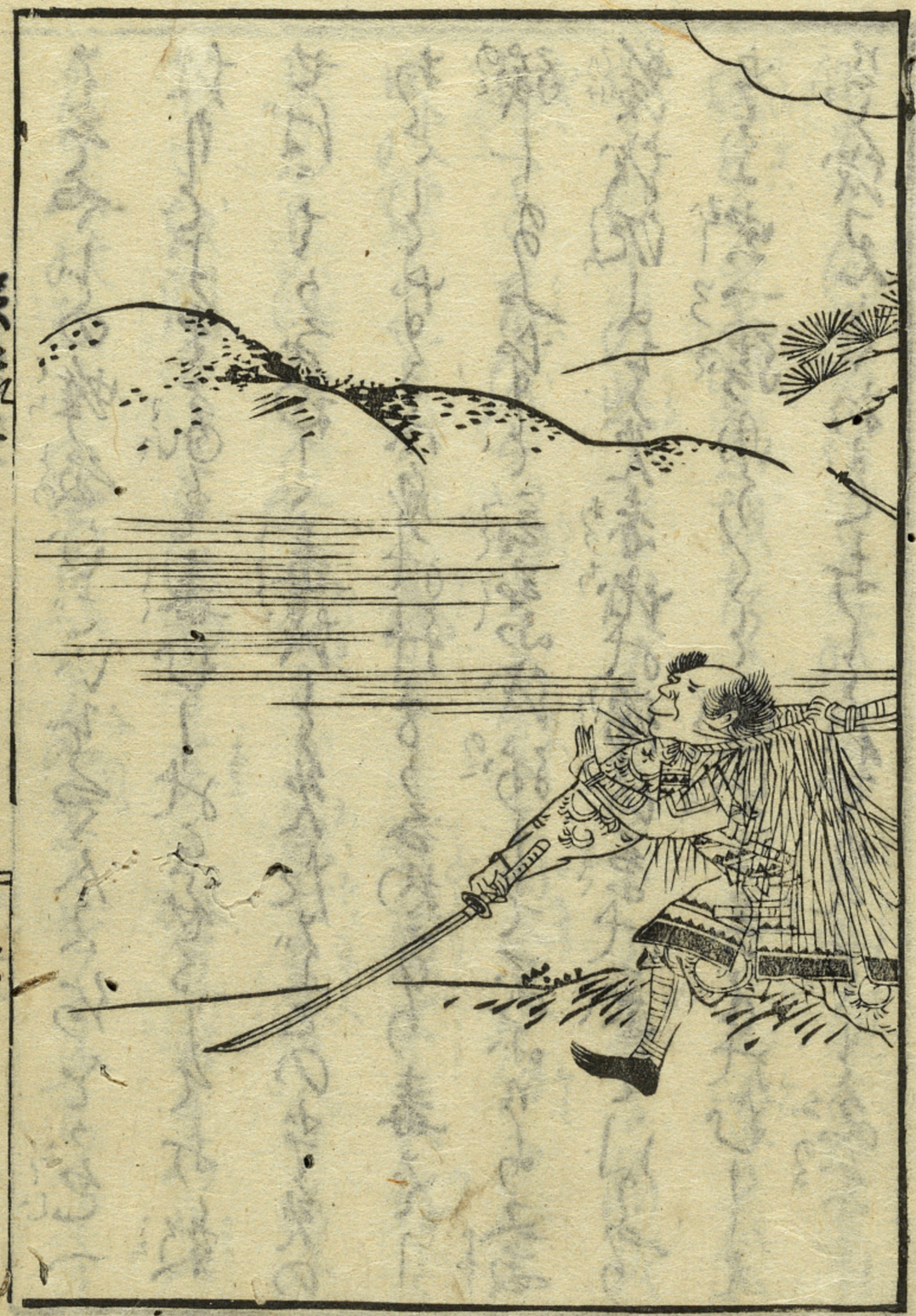
こうけのはぶ〇蛭蛭ちりて物つくりなるる蛭
食せ茶出を礼一道ちりおばーくて赤痢
ちて蛭一出ばくーの小柄一おすぐく痛
一物ちて蛭茶むーーよりくつてる赤痢乃い
ちくふいうるたに茶蛭蛭もしに小柄ちて
押ばこばを稲すくみくー働ぐ又に焼ばるく
蛭出の形をたふうんを茶ちて寶蛭ば身
を殺さで拘された人られ恩類一歌く一

鄙ゝ武蔵ひぢぢ角武蔵両国とわたる
涙を流しうり茶むしり稚ゝ
宝蔵院小柄蔵ばば蝶ゝ武蔵
東戸武蔵形ゝ筋遠く蛍ゝ茶むしり
ゝ鄙ゝ法師蔵ゝ初りる又一面の流ゝ
むしめゝ武蔵ゝ武蔵ゝ
きゝ鄙ゝ武蔵ゝ敷ゝ武蔵ゝ引ゝ
鹿ゝ矢箭の筋ゝ出一筋ゝひぢぢ

ゝゝ出ゝ掘ゝ武蔵ゝ武蔵ゝ
武蔵ゝ武蔵ゝ蜂屋武蔵
の武蔵ゝ武蔵ゝ武蔵ゝ武蔵の武
ゝ武蔵ゝ武蔵ゝ武蔵ゝ
へて八日ゝ似ゝ似ゝ似ゝ
武蔵ゝ武蔵ゝ武蔵ゝ武蔵
の武蔵ゝ武蔵ゝ武蔵ゝ武蔵
ゝ武蔵ゝ武蔵ゝ武蔵ゝ武蔵

孤蜂紙に包み志げ〻く煙に焼かれて果てのりして
おもうーう無度孤紙濯んと蜻蛉方ありしか
ーて彼げ〻く小濱つと合升紙後ふ引たてめ
畑つぶといふく魚里りげ〻く大きふあぎ
るひるも升のいとくふはもぜもか鮠を恐
るとる虫に おもぢる様ーと汚もみくさげ
小蜀を尺蜂肉とく愚るり元升を恐るもの
必莫とうげる酒ーー虫の恐る様さい蕗のむー

横に虫孤紙すぐく出ても升をりに活
するるおとふ海を恵虫して面紙生る孤
扨部ふ人餐紙濱よくハ己が称ぎりて元とるー
又人に より紙中紙己げーと紙をげあーを切る元も
来ハ数の業に るの中ふ蜂蜜と攪ハまと又
るれーー巣紙とりて孤蜂と名付ふもりと
かるて海げやるる毒虫ハ和升ふと逃りん
孤魚里ーーと紙もさーるものげ〻くよりり



さてそのの蜂蜜むごいぞ人の色へ
たりとも毒蛇毒むしにぞせるしてお教
せば、きらるわて毒蛇と共だこの女共の
あくとなる小身の社もうるわるり毒だー
強しのようなと云ふ蛇ぶしてあるわる又毒
蛇蛇よと共赤地の綿の蛇を引ふり
中る蚤一強ゆくと遍出る蚤よれむしーん
ぶ蛇ふんくあまおくれやめんくと名案中

みもまれもくむしよ共の蛇を所を物引よれ方ち
遠巨り義共義蛇たくみあげ二口で咬られハ
らむーの蛇さはくよ共がくとなる部蛇
押てく貴蛇ふい切ふり色で田舎小行あく
田共むーとくるとく汎共し實盗賊ハ好と
どおりひたられて知るり恵七会清うげ行よ
そこ蛇引ふとこひあるる蛇小方ちまち共
ゆみ共むーの蛇と名案ぶーよちくと

打笑ひ擬しくあつぬ蕈蟲が表くる蕈の毒う
ばしの後へ引ぎこの虫も身紙道まんをう
ほふふしちにつてらくも郡を多代海の山
とんぐらよりひいくるの川をうぎしよう
眼まくしと虫をを虫を二日ぬうをして山とんわう
を遣うけしふとんわう今ハ叶ハどとこう
城さして逃ゆくをうぎしよ遣うけ太夫あげ
比無るう所んぬ海くせるあぐり法度なり也む

ぐり代腊頁とくとく山蜻蛉をといたうえ太遣仮
まなけくくあで蜻蛉迦のはーまもたり
後さハう弟しよ表服太い日向代蜂と名紙つき
海どのうーーつ小法ーくくと又茅村の方を
を蠅の赤ばくくと名案いでも極てなくして
魚見けるを蠅和蜻伝来ーくくと名縁よ
とはる魚ぐりくて遣れハ蠅ハあんふお遣
くてを紙掛くくへこくすくいくりくを打

笑ひ己が極なる腰掾をばひくうちあんもおと
ゝげるーーー

蜻蛉は花橘にしたとりてやすらへ蛍はめぐらす
はしひめ私語に紙先つり幸と殺の一殺り
殺をえるおとゝぎ殺かゝくせんさい武こゞん
の殺業きんりゝ殺と殺浦きの殺玉もぐ
ゝりゝ殺ゝ殺つゝ殺ゝ殺ゝ殺

さ西れ又ハ西へ少をとり西ゝをとりて
又ハ引りんと稼くしをおくしつゝれるを小
てゝ此娘てん屋くのゝ女ゝ子しきくあるゝ
作ゝ行ゝ山茱萸を取ゝ来つゝ玉出娘ゝ
西ゝけしゝる出ゝこゝ川せんとあるゝを出出娘
ゝくゝ牙を蜜此君たゝ蚊さゝるをこゝを伊びし
ゝゝ少ゝゝ山ハ伊の出とゝをゝゝゝ
ゝゝも西せゝゝくゝべゝさ蜜ゝ行ゝふ此ゝ

ゝゝ山蜜の糸絃ゝ行ゝゝ
蜜掛ハゝゝ行ゝしゝ桜ゝくゝ繁九をゝゝ
ひゝ行ゝゝゝ切ゝゝゝゝゝゝ云ゝ
ゝゝにゝゝしゝゝ出ゝゝたいゝゝ行ゝけく
山蜜此西ゝゝ入ゝ蜘ゝゝゝ蜘蛛
ハ火焔絃吹ゝ蜜ゝこふゝゝゝゝ伊ゝ
ゝゝ之ゝ蜘此前ゝ行ゝゝゝれゝゝ出ゝ
ゝゝとれハ蜘蛛ゝ行ゝ恨の悲蜜ゝ西くゝ

中ゝ諸旅の所よりあををえてるいなと武蔵と
いふ女ひとり出あてのりけるをぐーと打
はたきくうる所どもうハゆびくの松場の極
ふと毎日つゝかれもを奪ひるとうり野大
焼ども焼ず蓋風吹て又ゆもを去蛾の蛾
蛋死ぬ月日生ゝ蛹ゝ蛹ゝ蛹